

星

小嶋祥三

現在（2017年1月半ば）、夕方の西の空には金星が輝いている。残照の中でもはっきりとみえる。そばに火星があるが、こちらはもう少し暗くなる必要がある。子供の頃、遊びに夢中になり、早く家に帰らないといけないと西の空をみた時、金星が異様に明るかったのを思い出した。日暮れが早かったことを考えると冬だったろうか。ネット（「お星様とコンピュータ」）で1950年代の金星のみえ方（出/没、宵の明星/明けの明星）を調べたが、年月を特定できなかった。

夜が更けてくると、並ぶ三つ星で有名なオリオン座、おおいぬ座など冬の代表的な星座がみられる。明るい星が多く、にぎやかである。赤みがかったオリオン座のベテルギウス、最も明るい恒星のおおいぬ座のシリウス、こいぬ座のプロキオンで構成する冬の大三角形は見事だ。冬の夜は寒いので、わざわざ外に出て星を眺めようという気分になれない。犬山の霊長研時代は徒歩で帰宅することがしばしばあった。30分ほどかかったが、ずっと空を見上げていた。東京よりも空気が澄んでいて、暗い星も結構見えた。国立天文台暦計算室の「今日のほしぞら」をみると、明るい星しか載っていない。そして残念なことだが、現在の東京では確かに暗い星はよく見えない。



（左）ネットより拝借した冬の大三角形。オリオン座の三つ星の左上がベテルギウス、左下がシリウス、右上がプロキオン。

（右）ネットより拝借した天の川とさそり座。右上の赤い星がアンタレス。

朝方には木星が比較的高い空で輝いている。そのすぐ下にいるのはおとめ座のスピカ。木星にはかなわないが、結構明るい星だ。東の方に目をやると、夏の星座のさそり座がある。アルファ星のアンタレスが見える。さそり座は子供の頃星を見始めて最初に見つけた星座だ。アンタレスの赤い色は印象的だった。「さそりの赤目が南中し」と宮沢賢治が歌っている。そして東の地平寄りに土星が見える。ただ、日の出が近く、東の空が次第に明るくなり、長い間見ることはできない。